

秋成随筆の教材価値について―『藤簍冊子』と『胆大小心録』を中心に―

大森 楓

本稿では『藤簍冊子』と『胆大小心録』に着目し、秋成随筆の教材価値について論じている。平成三〇年に公示された高等学校学習指導要領から古典教育では扱う古典作品も定番教材ばかりではなく、幅広く選択されなければならないと考えた。そこで古典教材は定番となつている作品に加えて、新しい教材の可能性を探る必要があると言える。そこで近年の古典教育における定番教材化に対して、秋成随筆を新しい古典教材として提案した。

『藤簍冊子』はその文体が擬古文になつている点に着目した。秋成が古典の規範や権威を解放し、現代からの批評を可能にしたことを明らかにした。また『胆大小心録』では口語文体を用いることで秋成自身の思想を色濃く反映する効果があることを明らかにした。これらは秋成が古典における拘束を解放した一連の流れである。

秋成は古典における様々な拘束を解体することによって、古典作品に存在した壁を取り払つたのである。この古典作品に存在した拘束が取り払われることで『藤簍冊子』と『胆大小心録』は主体的な読みという行為が成立しやすくなつていると言える。

学習者にとって古典作品における拘束というのは、古典に親しんだり深く読んだりすることを拒む壁となる。多くの古典作品にはこの壁が存在している。この壁というのは文法であったり、古典作品の時代に応じた古典常識であったり様々な部分に存在している。そのため古典教育では文法や現代語訳に多くの時間を割きながら、教材を読んでいく。しかしそこに多くの時間を割いているため、古典作品を文体や構成に着目しながら深く読む時間を取るのは難しくなる。

そのような問題を解決してくれるのは様々な拘束を解体し、学習者にとつても親しみやすい『藤簍冊子』や『胆大小心録』であり、古典教材として適していると論じた。